

# 仙台城下の年末大売り出しを創設した

## 「只野小右衛門」

### 江戸時代の年末大売り出し

十二月に入ると街はクリスマス商戦、年末大売り出しで賑わいだします。クリスマスはともかく、年末の売り出しは、もともとは正月という重要な年中行事と密接に関係して行われたものでした。年末大売り出しを「歳の市」とも言うのは、歳の始めに行う行事に必要な物を取り揃えるための「市」という意味合いが込められているのです。

仙台の年末大売り出しも、戦前は「歳の市」と呼ばれていました。さらに遡ると、江戸時代の仙台城下では、「歳の市」は芭蕉の辻を中心に奥州街道沿いの国分町とそれに直交する大町周辺に限って行われ、「仲（中）見世」とも呼ばれていたのです。当時、仙台城下の国分町や大町の道路には四谷用水が流れており、「中堰」と呼ばれていました。「歳の市」の仮設店舗（見世店）はこの中堰をまたいで作られたので、「仲見世」と呼ばれるようになった、と言われています。

この仲見世は十二月二十五日から大晦日まで開かれ、城下だけでなく、近隣の村々からも大勢の人数があり、余りの人ごみで時には負傷者も出るほどだったといえます。そこでは、正月用の道具や飾り物にとどまらず、骨董品、瀬戸物、子供向けの玩具なども売られました。最近、あるテレビ番組で「青い色

の達磨」と話題になった松川達磨も、仲見世で売られた正月の縁起物だったのです。

### 年に二回開かれた歳の市

その後、明治時代に入り、それまで武家屋敷街だった東一番丁が新しく繁華街になると、歳の市が開かれる場所も明治十（一八七七）年頃には東一番丁に移り、さらに明治二十一年には南町通に移っています。場所は移っても、縁起物などを売る店や、人形・からくりなどの見世物小屋が立ち並ぶ賑わいは変わりませんでしたが、次第に「仲見世」と呼ばれることは少なくなっていくようでした。

ところで、このころ人々の生活の上である大きな変化が起きました。それは旧暦と新暦の併存です。明治政府は、それまで使われていた太陰太陽暦（旧暦）から西洋の暦（太陽暦）に更新することにし、明治五年十二月二日を明治六年一月一日としました。以後、公的な行事はこの新暦で行われるようになったのですが、人々の生活は依然として旧暦が用いられていました。そのため、歳の市も新暦と旧暦の二回開催されるという事態になったのです。歳の市だけでなく、元朝参り（初詣）などの正月行事も新暦と旧暦の二回行われるということが、戦前まではごく普通だったのです。

### 仲見世の創設者

このような仙台の歳の市は仲見世の歴史を振り返る時、一人の人物に行き当たります。大町の有力町人だった只野利右衛門です。

只野家は伊達家譜代の家臣で、永禄年間（一五五八〜七〇）には米沢城下大町の肝入という町役人の職に就いていました。その後も政宗に従って、岩出山から仙台に移り、大町三四五丁目の肝入として、以前にご紹介した検断の青山家と共に幕末まで代々、町の運営に当たった家柄でした。

この只野家の二代目で仙台に移住してきた時の当主であった小右衛門は、大町の肝入に任じられた際に、当時「生菓原」と称されていた宮城野原に畑を下賜されました。ところが、小右衛門はこれを藩に返上したのです。その代わり小右衛門は、毎年十二月二十五日から大町などで仲見世を開くことと、そこに出入した者からテナント料を徴収して自分の収入とする許可を藩から得たのです。

こうして始まった仲見世は、只野家の管理下で江戸時代を通じて大賑わいを続けたのです。自分の収入と町の繁盛を両立させた只野小右衛門は、実に先見性のある人物だったといえるでしょう。



大勢の人でごったがえす仙台の歳の市。大正12(1923)年12月撮影(仙台市歴史民俗資料館所蔵)



「慶応元年仙台城下図屏風」にみる仙台城下大町の町並み(仙台市博物館蔵)

# 仙台市史

江戸時代の仙台を知るなら

通史編 近世 1~3

◆各A5判 600頁前後 オールカラー 定価3000円(本体2858円)  
このほか、仙台の歴史を各分野で続々刊行中!

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館・櫛宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183  
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074